



1 研究主題とサブテーマ
確かな学力を身に付け、自ら学習する児童の育成
 ～算数科の学習を通して、自分の考えを持ち進んで発表できる児童の育成～

2 研究主題設定の理由

- (1) 学校教育目標から
 本校の学校教育目標は、かしこく（自ら学ぶ子）やさしく（思いやりのある子）たくましく（心も体も丈夫な子）であり、児童が楽しく学ぶことのできる、そして、常に子どもたちが生き生きと活躍する場所のある学校を創造することを目指している。
- (2) 学校経営方針から
 「分かりたい」「できるようになりたい」という子どもの向上欲求や、基礎的な知識や技能を確実に身に付けさせたいという保護者の期待に応えられる学校づくりを目指している。
- (3) 児童の実態から
 平成22年度から4年間、国語科の研究を通して『伝えあう力』を育み、言語能力の育成を図るべく努力を重ねてきた結果、ある程度の成果がみられてきた。算数科において、基礎的な学力は概ね付いているが、応用力の必要な問題や説明を伴う問題には苦手な児童の実態が見受けられる。
 以上のことから、これまでの研究で培われてきた国語の力をもとに、昨年度から算数の研究に取り組むことにした。

3 研究主題のとらえ方

- (1) 「確かな学力」とは
 ①基礎基本が身に付いている。
 ②既習事項を活用して解決できる。
 ③進んで話したり、聞いたりすることができる。
 自分の考えや、思いを相手に伝え、相手の考えや思いをしっかり聞き、理解し、自分の考えとのちがいが共通点を見だし、更に自分の考えを深めていくために必要な力である。
- (2) 「自ら学ぶ児童」とは
 ①自力で解決できる児童
 ②進んで課題を見つけて取り組む児童
 ③話し合い活動に意欲を持って取り組む児童

4 研究の方針

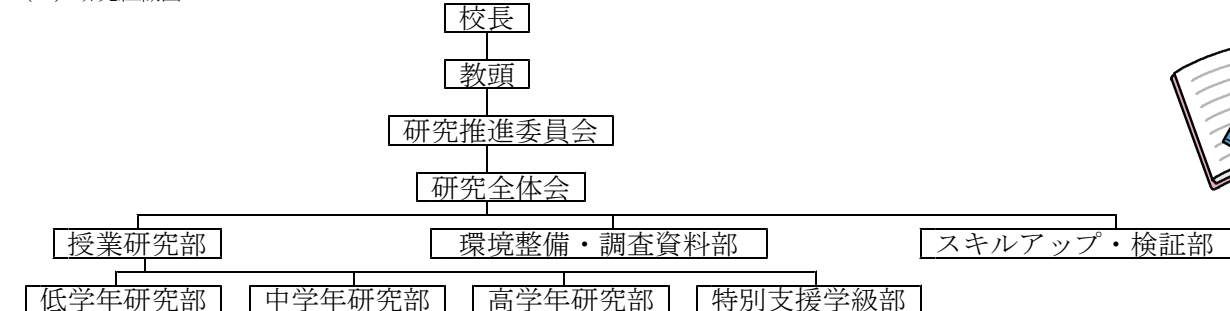
- 研究主題を具現化するために、実態を基に、仮説を立てて検証授業を行い、授業研究会で成果と課題の共有化を図る。（1学期中に全学年で研究授業を実施する。）
 - 校内研修の日常化を図り、自分自身の授業力の向上をめざす。
- 研究授業のあり方
 ＊授業は、学年毎に実態に合わせて単元を決める。研究はブロックで進める。
 ＊日々の授業実践に関わることは、推進委員会で立案し、全体会で決定する。
 ＊全体の研究授業は、各ブロック1回合計年3回。ブロック内研究授業は各ブロック年1回とする。
 ＊先行授業には、その学年の教員のみが参加する。指導案は全員に配付する。
 ＊各研究授業には指導者を招聘し、指導を仰ぐ。

5 組織

(1) 役割分担と活動内容

役割	活動内容
校長・教頭	○校内研修の総括 ○校内研修の指導助言 ○渉外 ○指導者招聘
研究主任	○研究の推進 ○研究計画の立案
推進委員会	○研究の運営・推進 ○研究授業・授業研究会の運営及び調整 ○各学年の推進・連絡調整 ○全体に関わる指導の立案
研究全体会	○全体的協議・決議や理論研修 ○研究授業・授業研究会
学年部	○各学年の研究・推進・教材研究 ○指導案作成 ○授業研究会の実施・評価
授業研究部	○指導案形式再検討 ○各ブロックの目指す児童像再検討 ○学習の流れ、学習規律の再検討
環境・調査部	○算数活動を支える環境づくり ○資料掲示物等の作成 ○各種学力調査・意識調査の集計
スキルアップ・検証部	○スキルアップタイムの計画・実施 ○児童の定着度の検証（○各種学力調査の集計）

(2) 研究組織図



目指す児童像

- ①基礎基本を身に付けている。
低学年 加法減法についての理解を深め、それらを用いる能力を伸ばす。
中学年 乗法についての理解を深め、適切に用いることができ、除法の意味についても理解する。
高学年 数量の関係を表す式について理解を深め、式を用いることができる。
- ②算数的活動の楽しさやよさを感じ取ることができる。
低学年 具体物を用いた活動の楽しさを感じる。
中学年 具体物を用いたり、言葉・数・式・図を用いたりして考える楽しさを感じる。
高学年 具体物を用いたり、言葉・数・式・図を用いたりして考え、説明することの楽しさを感じる。
- ③既習事項を活用し、解決方法を自分の言葉で説明し、お互いに生き生きと学びあう。
低学年 自分の考えを進んで発表しようとする。
中学年 自分の考えを、相手に分かるように説明しようとする。
高学年 自分の考えを、式や図を効果的に使い、相手に伝えようとする。
- ④より多くの、より困難な問題に取り組む力がある。
低学年 いろいろな問題に取り組もうとする。
中学年 より難しい問題に取り組もうとする。
高学年 自分の学習に合ったコースを選んで学習に取り組もうとする。

